

# 語呂合わせごろごろ5656

な に さ な に よ か かいそく  
7・2・3から7・2・4に変わるデジタルの時計見ながら快速を待つ

たわらまち  
俵満智「サラダ記念日」より

こんなことができるのも日本語の特質であろう。数学に出てくる定数にも、色々な語呂合わせがある。代表的なものをピックアップしてみよう。

## 【平方根】 $\sqrt{2} \sim \sqrt{10}$

$$\sqrt{2} = 1.41424356 \dots \cdot \text{「一夜一夜に人見頃」}$$

$$\sqrt{3} = 1.7320508 \dots \cdot \text{「人並みにおごれや」}$$

$$\sqrt{5} = 2.2360679 \dots \cdot \text{「富士山麓オウム鳴く」}$$

これらはよく知られているが、 $\sqrt{6}$  以上になると余り一般的ではない。

$$\sqrt{6} = 2.44949 \dots \cdot \text{「似よ良く良く」}$$

「似たよシクシク」  
「ふたよ二夜シクシク」

と覚えるのだが、 $\sqrt{6} = \sqrt{2} \times \sqrt{3}$  であるから、 $\sqrt{2}$  と  $\sqrt{3}$  を知っていれば、何とか計算できる。

$$\sqrt{7} = 2.64575 \dots \cdot \text{「じむし地虫、イナゴ」}$$

「な(菜)に虫いない」

辞書を引いたら地虫という言葉は実際にあった。大辞泉によれば「コガネムシ科の昆虫の幼虫の総称。体は乳白色または黄褐色の円筒形で、C字状に曲がる。頭は褐色。地中で植物の根などを食する。また、ケラなど地中にすむ昆虫をいうこともある。」とある。もちろんイナゴは地虫ではない。両方の語呂合わせとも5を「い」と読んでいるところが苦しいところである。「い」は1の語呂合わせに使うこともあるので、注意が必要である。二番目の語呂合わせの最初の(な)は、ルートの中の7をさす。

$$\sqrt{8} = 2.828427 \dots \cdot \text{「ニヤニヤ死にな」}$$

「二羽二羽死にな」

これも  $\sqrt{8} = 2\sqrt{2}$  であるから、 $\sqrt{2}$  から簡単に求めることができる。

$$\sqrt{10} = 3.1622 \dots \cdot \text{「(人丸は)みいろ三色に並ぶ」}$$

(ひとまる)は $\sqrt{10}$ の部分を言っている。「にならぶ」は2がふたつ並んでいるという意味である..

## 【円周率】 $\pi$

円周率が 3.14・・・ということは誰でも知っていることであるが、もっと多くのケタ数を覚える方法がある。

3.141592653589793238462643383279・・・

「<sup>さんいしいこく</sup>産医<sup>む</sup>師異国<sup>さんじ</sup>に向<sup>みやしろ</sup>こ<sup>むし</sup>う、産児<sup>やみ</sup>、御社<sup>な</sup>に、虫<sup>な</sup>さんさん<sup>な</sup>闇に鳴く」

「身一つ世一つ、<sup>い</sup>生<sup>いわ</sup>くに無意味、<sup>みやしろ</sup>曰<sup>むし</sup>く泣<sup>やみ</sup>く身<sup>な</sup>に、御社<sup>な</sup>に、虫<sup>な</sup>さんさん<sup>な</sup>闇に鳴く」

これらを作った人は、本当に 5963 であるが、これを作った当時、円周率を 31 ケタまで覚える必要が本当にあったかどうかは疑わしい

## 【自然対数の底】<sup>てい</sup> $e$

$e = 18281828459045 \dots$  「<sup>ふな</sup>鮎<sup>ひと</sup>、<sup>ふた</sup>一<sup>しごくあ</sup>わ二<sup>あ</sup>わ、一<sup>あ</sup>わ二<sup>あ</sup>わ、至極惜しい」

「鮎、一はち二はち、一はち二はち、至極惜しい」

魚を数えるのに、「わ」も「はち」も変ではあるが、束ねるか、ドンブリにでも入れればよいであろう。もう一つ自然対数と常用対数の変換に用いる  $\log_{10} e$  にも覚え方がある。

$\log_{10} e = 0.43494 \dots$  「(天下)の<sup>にく</sup>予算<sup>し</sup>難<sup>し</sup>し」

「天下の」というのはテンが下にある、つまり 10 が底であるということである。しかし 494 を「しにくし」と読むのには無理がある。

問題 1 碓氷峠に、数字ばかりを使った歌が詠まれている石碑がある。一説によれば武蔵坊弁慶の作という話もある。次のような歌である。

八万三千八 三六九三三四七 一八二 四五十二四六 百四億四百  
<sup>やまみち</sup>山道は<sup>さむ</sup>寒<sup>さみ</sup>くも<sup>ひと</sup>淋<sup>や</sup>しな<sup>よ</sup>一つ家<sup>しる</sup>に<sup>しる</sup>夜<sup>しる</sup>ごとに白<sup>しる</sup>くも<sup>しる</sup>も<sup>しる</sup>夜<sup>しる</sup>お<sup>しる</sup>く<sup>しる</sup>霜

次の歌を解読せよ。

四四八四四 七二八億十百 三九二二三 四九十四万万四 二三四万六一十

## 参考文献

- [1] 俵 満智 『サラダ記念日』(河出書房新社, 1987 年)
- [2] 矢野健太郎 『数学小辞典』(共立出版, 1968 年)
- [3] 片野 善一郎 『数の世界雑学辞典』(日本実業出版社, 1984 年)
- [4] 三浦宏文 『大きい数と小さい数』(日科技連出版社, 1974 年)
- [5] 西尾 茂巳 『続 1000 円電卓活用法』(同文館, 1984 年)